

# Principal Correspondence

## 幼少期ほど脳が発達する時期はありません

脳は可塑性というものがあり、文字通り柔らかいので、ものによっては乳児から高齢者まで努力や環境によって発達するものがあることは確かです(フランスのゴーギャンなどは40歳から絵を描き始めました)。脳は9歳ぐらいまでにはほとんど大人と同じ重さになります。それまでの幼少期の環境や教育は生涯にわたって大きな影響を脳に及ぼし続けるのです。中にはその時までしか身につかない時期があり、それを臨界期と言います。「15歳はなぜ言うことを聞かないのか？」日経BP, ローレンス・スタインバーグ/阿部寿美代訳)



- 視覚や聴覚や学習能力のような、人間の最も基本的な能力を司る脳の神経系統の臨界期は、非常に早くて短く生後数か月。
- 親との交流を通して言語や親との絆といった複雑な能力を司る神経系統の臨界期は、2歳くらいまでと言われます。
- 数学的能力にも臨界期があり、数値や記号のような「シンボル」を操作したり「量」を比較したりする能力などは6~7歳ごろまで。

●スペインの E.M という少年は耳が聞こえず言語訓練も受けずに育ちましたが、幸いなことに15歳で聴力を回復することができました。しかしずっと深刻な言語障害が続いていることが報告されています。「学力」と「社会力」を伸ばす脳教育」講談社+α新書, 澤口俊之)言語能力は12歳, 音声言語は8歳を超えては取得が難しいと言われます。

脳には異なった臨界期があるのです。しかしその大半は幼少期で終わります。  
普通の環境で育てば音声言語などは放っておいても育つのですが、  
3歳ごろからはそれなりの環境と教育が必要になっていきます。

子どもは、論理数学的知能, 言語的知能, 身体運動的知能, 音楽的知能, 美術的知能, 空間的知能などまんべんなく直接体験を通して学び, 基礎の反復徹底, 我慢をすること, やり抜くことを交えながら学んでいきます。概ね臨界期後は少しずつ才能を特化しながら, リーダーシップ, チームワークなども交え, 問題解決能力や科目横断型の汎用能力を身に付けていきます。米国が行った追跡調査でしっかりした幼児教育を受けた子と受けなかった子では, 受けた子は40歳の時に進学率, 所得率などが高く逮捕率などは低かったという結果でした。幼少期が教育投資に最も有効性が高いと言われるのはその為で, 政府の幼児教育無償化も理にかなった政策と思います。

私たちは, そうした観点からも大事なかけがえのない幼少教育を,  
リリーらしく新しいアイデアで実践していきたいと思えます。

# Principal Correspondence

## ★ロックは創造性の原点

私は留学した経験はありませんが、姉妹校の訪問や、学生を連れて英国へは30回ぐらい行ったことがあります(ぶっつけ本番のトラベル English しかできませんが)。建物は重厚長大で石造り。いまだに世界一制服好き?で、英国の歴史と伝統を重んじる姿は学ぶことも大きい反面、英国のどんよりとした天気、階級社会の重々しさ(労働者, 中産階級, 貴族階級でしゃべる英語が違う!)や空気に押しつぶされなかと他人事ながら案じたこともあります。



こんな社会からどうしてビートルズやローリングストーンズのような音楽が生まれてきたのだろうか?ロックでも英国はパンクロックや前衛芸術が盛んです。長年疑問でした。

しかし最近気が付いたのですが、そういう伝統の英国だからこそロックなのです。時代の空気に問題提起するのがロックの精神。時代のコモンセンス(時の常識)に対する反逆を音楽で、アートで、演劇で表現する。そう考えると、「哲学」も同じです。それぞれの哲学は、それぞれの時代への疑問や問題意識から生まれています。若者は自然とそうした新しい時代の変化と兆しを感じるのです。

急に堅い話になりますが、「創造性」…新しいものを生み出す力は21世紀の学力と言われます。何も無いところから何かを生み出す力のように思われますが、実は創造性には、ひとつのしくみがあります。「創造性」の原点は「問題意識」です。今現在当たり前と思っている音楽や芸術、文学、社会の在り方に疑問を感じ、新たに表現する、改革するのが「創造性」なのです。

それには多くの価値観や体験をして、「感性」が豊かでなければなりません。

そのスタートが★★★★「幼少期」なのです。

